

満州！ されど満州

・少年の心に深く

長野県 山岸 重治

一 渡満

私が生まれたのは長野県北信濃の小村、新郷村（現豊野町）である。祖父の代までは事業を営み、比較的裕福だった暮らしも、昭和初期の大恐慌と事業の失敗が重なり、生活は困窮していた。加えて、昭和十四（一九三九）年、八歳の私を頭に四人の男の子を残して母が死亡し、一家は離散した。父は子供たちを親戚に預けて単身で満州に渡り、国際運輸に就職できた。その二年後に新しい母を迎え、一家を挙げて満州へ渡った。

二 歳月

最初の居住地は開原。続いて昌図、郭家店と父の転勤に伴って、ほぼ一年間隔でそれぞれの地に

移住した。満州の土地柄は私の心身によほど適応したのか、初めて接する風物や現地人の生活などすべてが好奇心をそそり、故郷を離れた寂しさを忘れて、新しい日常に順応していった。

開原は大豆の特産地として栄え、小都市ながら清潔な街であった。小学校にはスチームと水洗便所が完備され、プールまである恵まれた教育環境であった。冬は校庭がスケートリンクに変わり、全校生徒が滑りまくる。田舎育ちの私は、こんなモダンな学校に戸惑いながらも、先生や級友に温かく迎えられて、転校の悲哀を感じることもなく新しい学校になじんだ。

昌図は殺風景な田舎町であった。日露戦争最後の戦跡となった鉢巻山の近くに、蒙古軍の兵営と、いわゆる昌図事件を起こした義勇隊の訓練所があり、中心地を囲むように満州国軍や日本軍の騎兵隊が駐屯し、すさんだ雰囲気を感じていた。小学校は二学年ずつの複式授業で、近くの村から列車通学する生徒や、義勇隊員の子弟も在学して

いた。数年前までは匪賊が出没し、家族が殺害された家庭の生徒もいて、荒々しい気風があった。居住地を離れた荒野に立つ娘ニヤンニヤン娘シヨク廟ニヤンニヤンの祭礼の日は、この殺風景な田舎町が一変して喧騒を極めた。

私が家族と過ごした最後の居住地、郭家店は蒙古王族が所有した美しい庭園で、今はハプチャツプ公園と呼ばれている。公園は小動物や郭家店神社が中心になっていて、日本人の大半はその地域内に住んでいた。春は杏の花が咲き誇り、秋には無数の渡り鳥が飛来する。ドロヤナギの自然林に囲まれた小学校は二学級だけで、日本人子弟のほか、満州人有力者の子弟も在学し、仲良く勉強していた。在留日本人は現地住民とも融和して生活しているように見えたが、それは国策会社満鉄が築いた民地政策に守られた独特の日本人社会であった。

三 陸軍燃料廠入隊

人生は思わぬことで変転する。昭和十九年三

月、四平中学の入試前夜、級友の家で猫に噛まれ、一夜のうちに全身に毒が回って、私だけが不合格の憂き目を見た。翌年の入試を待つのが耐えられず、四平街市の陸軍燃料廠技能養成所に軍属として入隊した。小学校を卒業した満十二歳の四月であった。

四平燃料廠は満鉄本線、連京線と平斉線・平梅線が交差する交通の要衝で、昭和十四年以降、アメリカの石油輸出禁止政策により不足した航空機燃料を合成する大コンビナートであった。内地の生産設備が空襲で壊滅したあとの陸軍にとって、四平燃料廠は人造ガソリンの生産拠点として、戦争遂行に重要な役割を担っていた。合成技術は緒に就いたばかりで、内地から日本有数の学者や技術者、工員が大勢送り込まれ、日夜を通じて研究と生産が続けられた。

私たちの同期生六十人の中には、十数人の朝鮮籍の生徒が含まれていた。全員が満州各地の小学校出身で、最年長者でも十八歳くらいであった。

私たちのグループは生徒隊と呼ばれ、基礎教育終了後は内地の教育機関に留学し、将来は陸軍技師として任官することが目標になっていた。授業は燃料廠内の粗末な煉瓦造りの教室で行われ、教官は理科系の大学を出て任官した技術将校や現場の技官であった。教科書もなく、化学を主体とした理科系の学科は難しい。教練の疲れも出てすぐに眠くなる。すると、教室を見回っている教頭が頭を小づいて回る。幸い私は化学が好きだったので、次第に興味がわいて熱心に勉強した。基礎化学の法則は今でも覚えている。

軍事教育や教練は正門近くの青年寮で実施された。寮は市内居住者を除き全寮制で、各内務班十八人が一室で寝起きし、互いに戦友と呼ばされていた。内務教官は戦車隊から派遣された歩兵の将校が担当し、朝の点呼から学科の授業を終え、寮に帰ってから消灯するまで、「一つ、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」という軍人勅諭や、「身を鴻毛の軽きに置き」という戦陣訓などを、

暗記できるまで続けさせられた。僅かな違反や、ささいな間違いでも即ビンタであった。特に連帯責任と称する対向ビンタは、仲間同士が互いに殴り合うつらい処罰であった。

教練は歩兵操典に従って行われ、木銃を担いでの分列行進や匍匐前進など、グラウンドで土と汗にまみれてたたき込まれた。非常呼集で起こされてからの夜間行軍では、眠りながら歩いて本隊からはぐれ、ビンタをもらった。不寝番で眠さをこらえながら寮内を巡回していると、布団をかぶって声を忍んで泣いている戦友がいる。情けないやつだとは思ったが、身につまされてこちらも悲しくなった。入隊以来帰省は一度あっただけで、たまたまなく親が恋しくなる。まだそんな年頃であった。

昭和二十年になると、二期生と各地の中学から動員学徒が入隊してきて、昭和寮は講堂から娯楽室まで満員になった。なぜか二期生は小学校高専科の卒業生が多かった。みんな私たちより年上

だったが、先輩面をしてつまらないことを理由に説教したり、ビンタを取ったりした。軍隊のしきたりとはいえ、何と愚かな行為であったかと慚愧の思いに駆られた。

人造ガソリンの研究と生産はかばかしく進まず、航空機に必要とされる九十オクタン価以上のガソリンの生産は容易に進まなかった。戦争が激化するに従い、燃料廠内は焦燥感に包まれていった。内地から送り込まれた徴用工が、興安嶺の密林で松根油を生産しているという。その試料が徹夜で勤務している燃料廠の研究室にときを問わず届く。持って来るのはいつも朝鮮族の人で、サイダー瓶に入った試料を置くと、言葉を交わすこともなくすぐに立ち去った。松根油がガソリンの生産にどの程度寄与するのか私たちには分からなかった。戦況は日増しに不利になっていくのを実感しながらも、「日本は不滅だ。神が守ってくれる」と元寇の話を引き言われると、何となくそのような気になって、どんどん厳しくなっていく

訓練にも耐えていた。

八月六日、広島に特殊爆弾が投下された。上層部では、特殊爆弾はウラニウムを原料とする原子爆弾であることは既に知っていて、研究室では直ちに説明会が開かれた。原爆の理論を聞いて驚いた。こんな兵器を持つアメリカと戦っていけるのかと、内心誰もが思ったに違いない。

徹夜で蒸留試験をしていた八月八日の夜半過ぎ、突如退避警報が発令され、闇の中を手探りで防空壕へ走った。飛行機の爆音が聞こえ、照明弾が燃料廠の周囲を明るく照らす。潜入していた組織が燃料廠の位置を知らせているのだ。敵機は爆撃もせずに飛び去り一息付いたが、これがソ連軍侵攻の前触れであった。

明けて八月九日には長崎にも原爆が投下され、ソ満国境の各方面からソ連軍が怒濤のように侵攻を開始した。

本土決戦に戦力を集中させていた関東軍に反撃能力はなく、各地で敗退を続けた。寮の隣部屋に

設置された通信隊には、前線からの悲痛な救援要請が入る。四平への侵攻も時間の問題となつて、燃料廠の十七、八歳の隊員にも召集令状が届けられた。徴兵年齢にも達しない少年隊員までを戦闘に送り込まなければならぬ事態となつたのだ。

寄せ書きをした日の丸の旗をたすきに掛け、少年たちは紅顔に決意をみなぎらせて前線に向かった。敗戦後も彼らが生還した話は聞かない。恐らくは、爆薬を抱えてソ連軍戦車に突入したのであらう。

間もなく燃料廠全隊員にも召集令状が発せられ、軍属だつた隊員は関東軍兵士になつた。私たち研修生も十三歳にして関東軍の兵士となつたのである。兵士に任命されると軍装が支給された。兵器は全員にわたるほどはなく、私がもらったのは毛糸のシャツと、足が二つも入りそうな編上靴だつたが、物資が欠乏していたときなので嬉しかった。靴にぼろを詰め、機械油で磨いて履いた。関東軍は防衛線を通化に構築して反撃するた

め、燃料廠も設備を移動して生産を続けよとの命令がでた。この期に及んでどうやって設備を移動するのか。疑問を挟む余地もなく、私は連絡員として、地図を片手に市内の隊員家庭へ命令伝達に走り回つた。

「八月十五日正午に重大放送がある。隊員全員は燃料廠に集合するように」という命令がで、再び市内への連絡に走つた。連絡を終えたのは正午近くで、放送は途中の日本人農家で聞いた。雑音のため意味が分からない。急いで戻つた燃料廠では、既に敗戦が確定的になつたことが判明していた。昨日までの徹底抗戦の命令が覆され、憤懣と安堵感が入り交じつた怒号と号泣で混乱を極めた。将校は怒り狂う隊員の前から姿を消していった。混乱が静まると、隊員は頼るものがなくなつたように肩を落として散つて行き、強烈な夏の日だけが人のいなくなつた広場を照らしていた。寮には久しぶりに電灯が明るくつき、隊員は酒をおおつて辺り構わず木刀で叩き回り、やり場のない

怒りを発散していた。敗戦の日の夜はこうして過ぎていった。

翌日からは、ソ連軍の進駐に備えて、燃料合成施設の破壊と秘密書類の焼却に追われる一方で、廠内に残っている石炭などの生活物資を家庭に配布するのに繁忙を極めた。ソ連軍は武装解除を要求して郊外で待機している。私は将校の軍刀を集めさせられた。手放すのを惜しむ祖先伝来の名刀や、お仕着せの昭和新刀も、命より大事に扱った三八式歩兵銃も縄で縛ってトラックに積んだ。

武装解除が終わるのを待って、ソ連軍は軍用トラックを連ね、威嚇射撃しながら進駐して来た。初めて接する異国の兵士は、硝煙のにおいを漂わせ、日焼けした顔を緊張させ鋭い目つきをしていた。覚悟はしていたものの、恐怖で身が震える思いであった。軽機関銃のような自動小銃の乱射を目の当たりにすると、日本軍が得意とする白兵戦などではとても太刀打ちができないことは歴然としていた。当初は警戒心からおとなしくしていた

ソ連兵は、日本軍に反撃能力がないとみると、目を覆うばかりの略奪、暴行を開始した。命懸けで戦闘をしてきた彼らの暴虐行為にあらがうすべもなく、居留民は敗戦の悲哀をかみしめるほかはなかった。

四 ソ連軍収容所

数日後、将校は分離されて郊外の丘の上にある戦車隊跡へ、部下を叱咤していた威厳もどこへやら、丸腰の無様な姿で連行され、下士官とその他の軍関係者は郊外の南方、平東の糧秣貨物廠の収容所へ送られた。残された私たちと年少の徴用工や保安要員は、燃料廠の警備と残務整理に当たった。軍隊が消滅し統率者もない残留隊員は、食糧庫をこじ開けて酒や米を持ち出したり、寮に残された私物などを売って、自堕落な生活を送っていた。

ある日、見知らぬ男が来て、私に「研究室へ行ってくれ」と言った。不審に思いながら数日前まで働いていた研究室へ行くと、乱雑極まる室内

には、私服姿の三人の男が待つていた。一人は研究室長の日中尉で、目つきの鋭いほかの二人は知らない顔だった。彼らは一般人に変装して特別な任務を帯びているらしい。「こつちへ来い」と言われて、今まで入ったことのない奥の部屋に行った私は目を見張った。机の上には大量の貴金属類が広げられ、シェードを通した薄暗い光の中で輝きを放っているのだ。定量分析で白金線を使った経験はあったが、これほど大量の白金のるつぼ、金の網、白金や金の針金、銀塊などを見たのは初めてであった。驚く私に日中尉が、「急いで計量してくれ」と言った。百分の一グラムまで秤量できる化学天秤は使い慣れていたが、得体の知れない男たちの鋭い視線を浴び、緊張で手が震えた。種類別に量り終えたときには、全身に汗がしみ出していた。「ご苦労。このことは誰にも決してしゃべるな。早く立ち去れ」。私が部屋を出た途端に、バーンとキャビネットを閉める音がした。その音と、手にした白金るつぼの重量感、今も脳裏に

残っている。研究室に所属した隊員は戦時中の研究内容や保有した薬品類の行方について、中国側の官憲に厳しく追及されたと聞いている。私は年少者の故に、追及の対象から外されたい。追及を予期して、私に貴金属類の秤量をさせたのだろう。それらの行方はどうなったのか、長い間心のしこりになっていたが、自分史的な記録をまとめるに当たって、当時の資料を探しているときに発見した記録により、その使途が判明した。一部は中国関係者との工作に提供されたり、技術残留にかかわるトラブル解決などに使用された。残りには殺害された隊員の遺体とともに、地中に埋没されたことになっている。記録を書いた人は既に他界し、真実を知ることが永久に不可能となった。

九月の下旬だったと思うが、収容所から抜け出してきたI大尉が姿を見せた。「家族を残して収容所に入った隊員の中から脱走者が続出し、員数不足を追及されている。寮に残留している者が代わりに収容所へ入るように」と命令した。丸腰姿

ではあるが、I大尉は戦時中は、総務部長で研修所長も兼ね、軍律の化身のように厳格な男であった。軍隊が消滅したとはいえ、上官の命令は絶対服従の意識が残っていた私は、従うほかはないと思つた。I大尉はそれでも強硬に反対する一部の者には、「もし、収容所に入つて内地に帰るのが遅くなつたら、俺はどんな償いでもする。頼む」と員数合わせを改めて懇願した。反対した隊員はその夜、食糧倉庫を襲つたあと姿を消していた。私は消息が分からない家族を待つてゐるより、I大尉の言を信じて、寮に残つていた少年徴用工や同期生と一緒に収容所に行くことにした。このことは、意図的に仕組まれた交替劇？であつたのを、後に知るのであるが、市内の官舎にいた動員学徒も私たちより一足早く収容所に送られていて、その後シベリア送りとなつたとのことで、軍籍もない彼らの消息は今もつて不明である。

収容所に入った後、明日からどうなるのかと話し合つてゐるところへ、若い将校が入つて来た。

「気を静めて聞いてもらいたい、実は」と、言いくさうに話すのを聞いて、飛び上がるほど驚いた。私たちは脱走者の員数合わせに来ただけだと思つていたので、ソ連軍は、見せしめのために銃殺するというのだ。「何ということか!」。だまされたことへの怒りと、身の置き場もないほどの絶望感に打ちひしがれた。銃殺を宣告された私たちは、別棟の兵舎に監禁されて不安の日を送ることになった。先に来ていた燃料廠の人たちが、食べ物などを差し入れに来て慰めてくれたが、そんなことは何の足しにもならず、夜も眠れず体を寄せ合つて泣いた。

三、四日して巡視に来たソ連軍の将校が、監禁されている大半が少年であるのを見て、不審な顔をして戻つて行つた。その後、日本側の責任者を追及して真相が判明したのか、処刑は中止となつた。「助かつた!」ひどい目に遭つたものだが、そのときの開放感と言葉にならないほどであった。恐らくは、続出する脱走者に手を焼いた

ソ連軍の警告と威嚇だったのであろう。さすがにその後は脱走する者はいなくなった。

電流が通された三重の鉄条網に囲まれた広大な収容所内には、迷彩を施した大きな倉庫が点在していて、多くの物資が残っていた。これらを戦利品としてソ連領へ送るのは何としても悔しいことだ。戦時中は貴重品だった米や、砂糖や、タオルなどを、監視の目を盗んで兵舎に持ち帰った。酸っぱいうえに堅くて口に合わないロシアパンは隅の方に転がしておいて米を食べた。大量の物資があるのを知っている現地人が、鉄条網の外から品物を売れと呼び掛ける。こちらから毛布などを投げると、向こうから金を投げ返す。品物を売るのは禁止されているが、監視兵もやっているのを見て見ないふりをしていた。

連日の労働で体は疲れ切っていた。その日は珍しく楽な仕事で、しかも早く終わったので久しぶりに枯れ草の上で仲間と戯れていると、下士官らしいソ連兵が来て立ち止まった。あわてて仕事を

するふりをする私たちに、彼は拳銃のバンドを外して、「掛かって来い！」と笑顔で両手を広げるではないか。悪意はないようなので安心して二、三人で転ばした。彼は参ったという仕草をし、「ハラショー、マーリンケ（いいぞ子供たち）」と言う。意外な出来事に驚いたが、悪い気はしなかった。

彼は自分を指し「ロスキーソルダート（ロシアの兵隊）」、私たちを「ヤポンスキー、マーリンケソルダート（日本の子供の兵隊）」と言って両手を握って見せた。不可侵条約を破って何が握手かと思ったが、平素威張りくさる監視兵に接していただけに意外だった。彼は、私と鈴田を招いて積み込みが終わった貨車へ連れて行つた。扉を開けると新しい軍服の束が積んであり、早く新しいのと着替えろと手真似で言う。入隊したときから着通しの夏服はあちこちが破れ、朝夕の寒さが身にしみていたので、その好意が嬉しかった。着替えが済むのを待って、彼は日本式に挙手の敬礼を

し、「イワノフ」と自己紹介をした。「ヤマギシ」「スズタ」と私たちも名乗って敬礼した。「ハラシヨ、マーリンケソルダート」、早く行けと笑顔で手を振った。それ以来私たちは、マーリンケソルダートと呼ばれるようになった。イワノフは巡回に来ると冗談を言ったり、ロシア語を教えたりした。後に彼にシベリア行きの列車からけ落とされることになるとは想像もしていなかった。

仕事にも慣れ要領を使ったりしていたが、年少の私たちは疲れ切り、病気になったり怪我をする者が続出し、体力は限界に近かった。診療所の軍医は残り少ない薬をくれて、「何とかしないと参ってしまうぞ」と顔を曇らせていた。ときどきイワノフが来て軽作業に回してくれたが、その中に死体を埋める作業があった。

収容所内に大量の物資があるのを知っている現地人は、夜中になると徒党を組んで、鉄条網に板を渡して侵入し、物資を盗んでいく。高圧電流が通っている鉄条網に触れたり、監視兵の銃撃で殺

される者があとを絶たなかった。私と鈴田は、イワノフと蒙古兵のミューリンに連れられて死体を埋めに行った。雑草をかき分けて行くと鉄条網に死体が掛かっている。鉄条網に触れた部分は焼けただれ、接地した腹は裂けていた。銃撃を受けた方は、死体の回りに衣服の綿が散乱し、硬直した指が地面をかきむしっていた。意外と血は流れていなかったが、目を背けたくなる惨状であった。ミューリンに指示されて穴を掘る。草の根が張っ

ていてシャベルがうまく刺さらないが、恐ろしさで汗をかきながら掘った。足に縄を掛け、顔を見ないようにして掘った穴に引きずり落として土を掛けた。仕事が終わるとイワノフは、死人が持っていた金で柵の外の物売りから饅頭を買ってくれた。普段だったらのどから手が出るほど食べたいのだが、とても食べる気にならなかった。午後は作業を免除されるので体は楽だが、気持ちは暗れなかった。疲れ切つてつらい日は、密かに死体を埋める作業の順番を待つ気になっていたが、後ろ

めたさが残った。この収容所で何人殺されたであろうか。盗人とはいえ家族もいるだろうに、哀れなことである。死体を埋めた場所の近くを通るときは、自然と目をそらせて通るようになっていた。

連日の戦利物資の積み込み作業を続けているうちに、冬の気配を感じるようになったが、そのころになると、ほとんどの倉庫は空になった。作業が減るに従い隊員は順次シベリアへ送られていった。市内に家族を残している人は、これまでも何かと理屈をつけて居残っていて、「作業が終了したならば、解放されるか、満州国内にいたい」と申し出て、シベリア行きを拒んでいた。しかしその希望は受け入れられず、「シベリアの使役を終えたら早急に日本内地に帰す」というソ連側の説得に従わざるを得なかった。

出発の前夜は、鉄条網の下に掘られた秘密のトンネルを使って、買い出し隊が肉や酒を持ち込み、盛大な打ち上げ会となった。監視兵も加わっ

てらんちき騒ぎとなった。イワノフは国へ帰るという。親切にしてくれた彼との別れがつらく、抱き合って泣いた。不思議なことにシベリア行きを強硬に反対した人の姿が消え、見知らぬ顔が加わっている。日本側では、例のトンネルを使って外部の人と交替させたい。信じられないことであつたが、後に、交替に関係した人から話を聞く機会があつて、確かにシベリア行きの希望者を募つたという事実を確認した。

出発当日、積み込み作業をした引き込み線に貨車が付けられ、乗り込みが始まった。立ち会いに来たソ連軍の将校が私たちを見ると、「年少者は残せ」と言った。「せっかく覚悟を決めたのに！ 私たちはどうしても行く」と言い張り、ソ連軍将校の許可を得ただけが乗車することになった。特に敗戦直前に徴用されてきた年少者は、満州の冬を越す自信がなく、少しでも早く帰国したいと隠れるようにして乗り込む。私は何度も並んで許可を求めたが拒否された。一計を案じて列を離れ

て貨車の下をくぐって反対側に回り、顔見知り
に貨車へ引き上げてもらった。

出発間際に、車内の巡回に来たイワノフと目が
合った。彼は急に恐ろしい顔をして私を降ろそう
とする。そばの人にしがみつく私の襟を掴み、扉
まで引きずってけ落とした。ゴトン、ゴトンと
いつて列車が動いた。驚きと怒りで泣きわめく私
の目の前を、列車がだんだんとスピードを増して
過ぎて行った。イワノフが私の荷物を投げ落と
し、大声で叫んだ。「ドスヴィダニヤ、マーリン
ケ。ドスヴィダニヤ！（さようなら、さような
ら）」列車は遠ざかり視界から消えていった。し
ばらくはイワノフを恨んでいた。しかし、冷静に
考えるとあんな手荒な方法であったが、あのとき
列車から降ろしてくれなかったら、恐らく私は生
きては日本へ帰れなかったであろう。他国の兵士
ながら、しみじみとその恩義を感じるのである。

五 中国内戦

シベリア行きの最後の列車が出発したあとの収

容所は、膨大な物資と多くの捕虜がいなくなっ
て、まるで廃墟のようになった。年少者と病弱
者、そして病弱を装ってシベリア行きを免れた三
十余人は、燃料もない兵舎で十二月の寒さに耐え
ていた。食糧が乏しくなつて、以前うまくないと
隅の方に転がしておいたロシアパンを探し出して
飢えをしのいだ。乾燥して一層固くなつていた
が、カビも生えていない。少しずつかじつて食べ
てみると実にうまかった。

数日して、「解放するからどこへでも行け」と
指示された。これまでに確保した物品は支給し、
労働証明も発行するという。持ちきれない荷物は
トラックで運ぶことで話が付いた。取りあえず燃
料廠の官舎へ戻ろうと徒歩で出発した。予期しな
い事態で収容所へ送られたとはいえ、常識では考
えられない様々な経験をした兵舎を去るのは胸に
迫るものがあった。官舎に着いても約束したト
ラックは来ない。雪が降り始めた日暮れの道を、
荷物を取りに引き返した。しかし、労働証明はも

らえず、労働報酬ともいふべき荷物も、身の回りの品以外は持たせてくれなかった。ソ連兵には「早く出て行け」と威嚇射撃で追い立てられ、灯火ひとつ見えない闇の中を引き返す惨めさを、ただひたすら堪え忍ぶしかなかった。時折、背後で聞こえる銃声は、ソ連軍と交代に進駐してくる八路軍のものであった。

燃料廠の東門街官舎に戻ると、残務整理をしていた人や、脱走して戻っていた人たちが温かく迎えてくれた。私たちは、召集や抑留で男手が少なくなつた家庭に引き取られることになって、私は研究室の主任で、残留日本人の代表者でもある谷村さんの家で世話になることになった。

燃料廠は、国民党臨時政府が管理する陝北省立油化工廠に変わり、東門街や、市内の官舎に住む元隊員が、残っていた航空機用粗製ガソリンを自動車用燃料に精製していた。企画課長の谷村さんは、私が貴金属類の整理に関係したのは知っているらしく、研究室とは無関係な自動車庫へ配属し

てくれた。自動車庫は、敗戦時に關東軍が放置した故障自動車の修理に追われていた。部品や工具の名さえ知らない私の仕事は、さび付いた車体を解体して、部品やタイヤを外して運ぶことだったが、非力な私にはことのほかつらい仕事であった。まごまごしていると職人かたぎの先輩に怒鳴られたり、部品を間違えては投げ返されたりで、悲しい思いをした。

そのうちに研究室にいたことや、収容所帰りなのが知られると一目置かれるようになり、部品の名称や運転の仕方も親切に教えてくれるようになった。自動車の運転はどうかできたが、体の小さい私はクラッチのどのペダルにも足が届かなかった。そのため路上での運転はできなかったが、仕事には慣れて毎日が楽しくなった。

見習い期間が終わり、汽車股（自動車課）練習工の注記（名札）をもらった。通行人は市内要所にある検問所で嚴重なチェックを受けるが、注記を着けているとフリーパスで通れた。日本人と知

れても、警備兵は敬礼する。政府の職員ともなれば違うものだと思意になつて通つた。

週に一度は国民党幹部による学習会が開かれ、三民主義だとか中華民国国歌などの講義を受けた。日本式？で通してきた中国語も正しい発音を教えられるが、腰掛けのつもりでいる日本人職員は本気で覚えようとはしない。講師の李課長は戦時中のことを皮肉つたりしていた。退庁時には乗用車代わりのトラックで李課長を家まで送る。課長は家が近づくと共にクラクションを鳴らすように命じ、近所の人の注視を浴びて得意顔でのご帰宅となる。李課長はついでに石炭などを家に持ち帰るので、私たちもそれに便乗して廠内の物資を持ち出しては小遣いを稼いだ。

八路軍は四平街を包囲して、侵攻の機会を狙っていた。夜だけだった威嚇の銃声が日中にも聞かれるようになり、市民は内戦の激化に怯えていた。ときには油化工場へ一般人に変装した八路軍の特攻隊が押しかけ、隠し持った拳銃を突きつけ

て、燃料や工作機械などを要求した。訓練されていない警備兵は恐ろしがって、手をつけかねているばかりであった。奪つた物資はトラックで基地へ運び去つた。トラックは用が済むとすぐに返してよすが、運転手は言い含められているのか、八路軍内の様子は一切語らなかつた。

嚴戒体制下の四平市内に、突然のようにペストが流行し始めた。ようやく運転を再開した列車も四平駅は通過し、患者が発生した家は燃やされてしまう。外出は禁止され、工場も閉鎖された。防疫体制もない混乱だけに、市民はペストの恐怖におののいていた。非常事態でもトラックの運用は休めないで、自動車関係者は車庫へ泊まるように強制されていた。仕事は多くないし、一般家庭では高粱飯しか食べられないのに白米の飯が支給されるなど、一抹の不安を覚える毎日であったが待遇は悪くなかつた。

ペストの流行が八路軍の進撃を手控えさせたのか、銃声も聞こえない平穏な日が続いたのも束の

間で、数日後の夜半過ぎに激しく撃ち合う小銃音と、腹に響くような大砲の音で目を覚まされた。車庫の扉にもビシッ、ビシッと弾丸が当たる。

「いよいよ来たか。様子を見てこい」と言われて本部へ走り、玄関へ足を踏み入れた途端、ドーンという爆発音がして電灯が消えた。「あつ、手榴弾だ。もう本部は占拠されたぞ！」車庫へ戻る闇の中を、工場が一番高い建物から、機関銃のえい光弾が警備本部へ集中している。潜入した工作員によって攻撃目標は既に標定済みなのだろう。散開して応戦する警備兵は、すぐに弾丸を集中されて逃げまどった。月明かりの中で影絵でも見るようであった。意外と恐怖感はなかったが、危険を避けて車庫のトラックの下へもぐり込む。銃撃戦の合間に八路軍が吹き合う笛の音が聞こえた。警備兵は射殺されたのか逃げたのか、夜が明けるころには銃声がやんだ。トラックの下で腹這いになっていたので、小便が我慢できなくなった。撃たれないように棒きれにハンカチを結んで外に出

た。すっかり明るくなった広場には、もえぎ色の軍服を着た兵隊が焚き火を囲んで休んでいた。このときが八路軍の正規兵との初めての出会いであった。捕縛されるのは覚悟していたが、彼らはさして関心も見せず、あつちへ行けと指さした。

本部前の広場では、別の部署にいた日本人職員や、生き残った警備兵などが並んで尋問されていた。中国人の幹部は逃げてしまったのか、姿が見えない。私の番になると、日本語の上手な兵隊から、「あなたは日本人か？ 何をしていましたか？」と、意外にも丁寧な口調で聞かれた。別に隠す必要もないから、これまでのことを正直に話した。ペストのことを言うと、「ペストですか。あつはは！」と笑い飛ばされた。八路軍の侵攻を防ぐための謀略だということを、潜入した工作員によって承知していたのだろう。その後、あれほど大騒ぎしたペスト流行の話は立ち消えになった。警備兵は縛られて連れて行かれたが、私たちはボディチェックもされずに、「自動車関係の人

はまた来てもらいます。帰ってよろしい」と、食糧庫を開放して米を分けてくれた。狐につままれたような感じだった。心配していた谷村さんは、私から八路軍の話聞き、米までもらって帰ったのを見て、信じられないという顔をしていた。

八路軍が占領してから市内の様子は一変した。治安は見違えるほど良くなり、市内の至る所に宣伝ビラが張り出された。「八路軍は人民の軍隊である」「百姓の物は針一本奪わない」「団結して帝国主義者を打倒しよう」などと書いてある。私たちは骨の髄まで「日本の軍隊は天皇陛下の軍隊である」と教えられてきた。それが「人民の軍隊である」というのは容易に理解できなかった。だが、八路軍はスローガンを忠実に実践した。品物の代金はきちんと支払い、軍服姿の兵士が溝に落ちた荷馬車を助けたり、困っている人の手助けもする。日本の軍隊と何と違うものかと感心した。敗戦後の在留日本人は、ソ連軍の暴行や現地人による報復的暴行と略奪行為に苦しんできたが、八

路軍の支配下ではこのような行為は皆無になった。「八路軍は鬼のように残酷で、平気で人を殺す」と聞いていたことも、彼らの行動に接するに従い、信頼感に変わっていった。

八路軍は技術者を厚遇した。食事は近くの農家で白米の飯を炊かせてお菜も付けてくれたし、給与は担当の兵隊が紐で縛った札束を持って来て払ってくれた。定職を持たない日本人は、米の飯どころか高粱の粥くらいしか食べられないのにと、多少後ろめたい思いがした。それでいて八路軍の兵隊は食べ物は粗末だし、給料も小遣い程度なのに不平も言わず、まじめに勤務していた。日本の軍隊では些細なことでもすぐビンタを張られたが、八路軍ではそのような行為は見たこともなく、敬礼なども適当にやっていた。この違いはなぜなのか、不思議に思えた。

戦闘の長期化に従って負傷兵が増え、八路軍はその治療のために、野戦病院を増強する必要に迫られた。病院の看護婦として、日本人女性を差し

出すように要求してきた。在留日本人にとつては難題であつたが、強硬な申し入れを拒むことはできず、苦悩の末にくじ引きによつて決めることにした。年少者の私に詳しいことは分らないが、手記などから察するに、四平市内から百人を上回る女性が徴発された。三人を割り当てられた東門街では、奥地から避難してきた女性二人が、家族を失つて生きる望みもないからと応じてくれた。残る一人は、燃料廠時代に同じ職場にいたOさんが、よもやと思つたのにくじに当たつてしまつた。彼女たちが出発する日は、杏のつぼみも膨らみ始めた穏やかな日であつた。地区の住民に見送られ、涙ながらに別れを告げて東門街を去つて行つた。

戦闘は一進一退を続けながら、圧倒的な戦力を持つ中央軍が優勢に戦いを進め、八路軍の旗色は悪くなつていった。前線が持ちこたえている間に、八路軍は国民党の施設から徴発した物資や機械類を奥地の基地へ運んだ。

そのようなときに、先日の工作員が来た。「同志。今夜、我が軍の基地へトラックが行く。一緒に来てくれ。運転手の福田さんも同意している。基地に着いたら入隊の手続をして武器を渡す」と言う。八路軍に入るべきか迷つたが、慎重な性格の福田さんが一緒ならと覚悟を決めた。世話になつた谷村さんに言えば反対されるに決まつているので、「自動車の仕事で二、三日行つてきます」と嘘をついた。「前線の使役に出るより安全だろう。気を付けて行つてこい」まさか八路軍に入るとは思つていない谷村さんは許してくれた。

夜になるのを待つて、收容所から持ち帰つて床下に隠して置いた背囊に身の回りの品物を詰め、谷村さんの家族に送られて家を出た。もう帰らないかもしれない。嘘をついて出て行く後ろめたさを振り切り、少し離れた林の集合場所へ急いだ。前線から絶え間なく銃声が聞こえ、星もない真つ暗な空を、えい光弾が光の尾を引いて飛び交つた。官舎街は明かりもなく、息を潜めて恐怖に耐

えているようであった。

懐中電灯で私を認めた作員が、「よく来たね」と言つて、私の背囊を荷台の兵隊に渡した。作員と私が助手席に乗り、福田さんがクラシクを回しエンジンを始動させた。少し走るとエンジンの調子が変になつて止まつてしまつた。福田さんがボンネットを開けて点検し始動させるが、少し行くともた止まつてしまう。作員の顔色が変わつた。「二体どうしたのだ。夜が明ければ敵に発見される」、拳銃を突きつけながら怒鳴つた。「駄目だ。エンジンが割れている」と答える。油で汚れた福田さんの手にはピストンの破片があつた。私は「あつ」と思つた。ピストンの破片など簡単に取り出せるはずがないのだから、福田さんが何か工作をしたなと思つた。しかし、それを見た作員は、「仕方がない。君たちは残れ」と言つて、荷台の兵隊を降ろして暗闇の中へ消えていつた。

「ああ、うまくいつた」福田さんはへたり込むように腰を下ろし、立て続けに煙草を吸つた。

「断り切れずに八路軍に入ることにしたが、女子供ばかり何家族もの避難民を預かつているんだ。俺がいなければ路頭に迷つてしまう」福田さんは考えた末にチョークを引いたままで走り、エンジンの故障に見せかけたのだ。「君には済まないが、本当は八路軍入りはやめた方が良いと思つていたので」と話した。私の八路軍入りは挫折したが、福田さんの機転が正しかったのだ。あのまま八路軍の兵士になつていたら、私の人生も大きく変わつていたであろう。トラックを故障させて戻つたのに、別にとがめられもしなかつたので胸をなで下ろした。

戦闘は続いているのに、談笑しながら北へ向かつて歩いて行く男の集団が目立つようになってきた。八路軍が農民に変装して撤退を始めているらしい。服が出つ張つてゐるのは、武器を隠している証拠だ。

その前夜の戦闘は特に激しかった。これまでは住宅地を意識的に避けているように思われたの

に、銃弾が容赦なく飛んでくる。住民は畳で窓をふさぎ、壁に当たる弾の音に怯えて息を殺していた。夜半過ぎに銃撃音が途絶え、急に静かになった。静寂さがかえって不気味で、眠れぬまま夜を明かした。昼ごろになって激しくドアを叩かれ、恐る恐る出てみると、見たことのない服装の兵隊が、「パーロ（八路軍）はいないか」と銃を突きつけている。「中央軍だ！」室内を確認し、谷村さんが住民代表なのを知っているらしく、どこかへ連れて行った。間もなく戻ってきた谷村さんから八路軍の撤退を知らされた。一夜で四平地区を制圧した八路軍は、また一夜で消えていった。中央軍を阻止している間に各施設から物資を調達し、共産主義の宣伝工作をして撤退した見事な戦術に感心した。しかし、逃げ遅れて捕虜になった兵隊や、置き去りにされた負傷兵が血まみれのまま街路樹に縛られていた。うなだれている彼らの姿を見るにつけ、戦争とは何とひどいものかと身にしみて思った。

六 引揚げ前後

国民党が四平市を制圧すると、市内は活気を取り戻した。市街地の至る所に屋台が出現し、これまで姿を消していた物資や食べ物売り買いの声で賑わった。だが、職もない日本人の生活は惨めで、売り食いの品物も底をつき、ひたすら引揚げの日を待った。私が寄寓していた東門街から居留民会へ連絡員を派遣することになり、中国語も少し話せるからと、年少の私に役が回ってきた。電話も通じないときなので、鉄道線路をまたぐ唯一の跨線橋昌平橋を渡り、約五キロメートルの距離を居留民会へ通うのが日課となった。

国民党政府から居留民会へ派遣されていた李大尉に気に入られ、専属連絡員として彼に従って行動した。完璧な日本語を話す李大尉から指示を受けると、私は軍隊時代のように復唱し、敬礼して居留民会へ駆け戻る。そんな動作を見るのが気分が良いのか、李大尉は些細なことを言いつけた。少々しゃくに障ったが、重宝されてかわいがって

くれるので我慢した。後に私が犯した重大な過ちを、李大尉に救われることになるのであった。

六月中旬になって、待ち望んだ引揚げ開始の通達がでた。東門街の住民も故郷へ帰れる喜びに胸を弾ませて準備を始めた。私もわずかばかりの物を入れるリュックサックを縫いながら、忙しくなった仕事に追われていた。

このときになって難問が持ち上がった。中国国民党政府は陵北省立油化工廠再建計画の実施に当たり、元燃料廠の技術者を留用させたいという指示をだしたのである。「帰心矢のごとし」という状態の日本人としては頭の痛い問題である。軍隊時代と違い、命令で留用させることはできない。しかし、以前から石炭液化の研究に従事していた人たちにとって、軍の制約を受けずにその技術を完成させたい、という思いは捨てがたいものがあった。問題は家族をどうするかということ、不足する技術者をどう補充するかという二点であった。結局、必要最小限の日本人技術者が

残留して研究を進めながら、中国側の技術者を育成してゆき、その成果を見ながら、帰国を希望する日本人技術者を順次帰国させるという案に政府側も了承した。これで油化工廠の再建計画も軌道に乗るかと思われたが、これが短期間で挫折するとは誰にも予想ができなかった。谷村さんも立場上残留することになり、家族は私が連れて引き揚げることになった。未成年の私としては大変な責任を負うことになったが、これまでお世話になった恩義に報いるためにも、この役を果たそうと覚悟を決めた。

四平市居留民の引揚げが始まり、東門街と二哩地区とほかの官舎の人たちの出発は、市内では最後に近い七月三日と決まった。喜びはあったが、戦禍を受けた内地の様子は皆自分からないので、無事に帰り着けるだろうかと不安は去らなかつた。しかし、持ちきれない荷物は二束三文で売り払うなどして、引揚げの準備を進めた。私には気掛かりなことがあった。敗戦以来、消息が途絶え

ている家族のことであった。満鉄関係者を通じての伝言で、父が内戦中の使役に出て迫撃砲弾で肩を負傷して病院へ送られたという話だけは聞いていた。悩んでいても仕方のないことなので、とにかく内地に帰って家族を待とうと腹を決めた。

連絡員の任務は六月末に終わり、居留民会からの名簿と必要書類を受け取って、李大尉に別れの挨拶をした。李大尉は他国の軍人なのに、「よく働いたね。無事に帰れることを祈るよ」と親切に言ってくれた。温かい言葉を聞くと、別れが惜しまれて涙が出た。

事件はこの後で起こった。東門街の人たちに頼まれていた肉などの買い物が残っていたのである。肉を買って代金を払おうと、ズボンの尻ポケットに手を入れたら、金を入れた封筒がない！すられたか、落としたか。急いで引き返すと、若い男が私の封筒から金を出して数えながら歩いて来る。私は「泥棒！」と叫んで取り返そうとしたら、逆に若い男に「この日本人が泥棒だ」と叫ば

れ、私は周りの中国人から殴る蹴るの暴行を受けた。どうやって逃げ帰ったか分からないが、気が付けば服はぼろぼろ、顔は腫れ上がり、目を開けるのもやっとのことであった。

皆は、「金は仕方がない。無事で良かった」と慰めてくれたが、そのときになって封筒には引揚げのための書類と名簿が入っていたのを思い出した。これには地区の責任者も青くなつた。全部私の不注意からである。傷の痛みも忘れて居留民会へ戻った。「どうしたのか、その格好は」残って仕事をしていた李大尉は私を見て叫んだ。事情を話したら、彼はしばらくして「分かった。私が責任を持って関係先に連絡しておく。そのまま出発しなさい」と言ってくれた。李大尉の恩情で事なきを得そうであった。以来、私はズボンの尻ポケットに物は入れない。

出発の前日、居留民会へ行ってみた。もう誰もいないが、引揚者の集合場所が書いてあった。もしやと思い、当たりを付けた東本願寺へ行ってみ

ると、見覚えのある郭家店の人たちがいる。私を見付けた弟が、「兄ちゃん！」と叫んで駆け寄って来た。来ていたのだ。父も母もいた。太っていた父はすっかり痩せていたが、「肩に破片が残っているが大丈夫だ。先に帰って親戚に身を寄せるように」と言った。髪をざん切りにした母は、もともと小柄なので少年のように見えた。嫌な目にあつて意気消沈していた私は、予期しなかった家族の無事を確認できて元気を取り戻した。

昭和二十一年七月三日、出発の日が来た。中国側の要請で残留する人の中には、家族も一緒に残す人がいた。そんな人たちみんなに見送られ、持てるだけの荷物を背に、幼い子の手をしっかりと握って、敗戦以来苦難の日を過ごした官舎をあとにした。「家の者を頼む。内地でまた会おう」と、谷村さんは私の手を強く握った。混雑の中で子供たちをはぐれさせないように注意しながら引き込み線に入った。乗車前に中国官憲の検閲を受けることになるが、先日の事件で書類を無くしている

私は気が気でなかった。地区の責任者が事情を話すと係員は了解していた。李大尉が約束通り手配をしてくれていたのだ。私は安堵感で体中から力が抜けるようだった。

列車は無蓋貨車であつた。女子供を貨車に押し上げ、床にむしろを敷いて居場所を確保した。列車は長い汽笛を鳴らしながら発車した。見慣れた四平の風景が流れるように過ぎ、南下した。途中、懐かしい場所を見ようと目を凝らしたが、列車はお構いなく走り続けた。

見たかった奉天（瀋陽）の街も気づかぬ間に過ぎ、二昼夜にわたる貨車の旅は錦州近くの草原の駅で終わり、その夜も貨車の中で過ごした。連絡などで休む暇もなかった私は前後不覚に眠り込み、腹巻きに入れていた虎の子の金を抜かれたのも気付かなかつた。

翌日は近くの収容所まで歩いた。ここは満州軍閥張学良の兵舎で、敗戦まで関東軍が使用していた。森に囲まれた練兵場に接して幾棟もの兵舎が

建ち並び、各地から集結した引揚者は、乗船の順序がくるまでこの收容所で過ごすことになった。

乗船の順序がきて、やっと收容所を出発する直前、中国側の要請で燃料廠に残った人たちを見かけたという噂が流れた。そんなはずはないと、誰もが思ったが本当であった。団の責任者が確かめに行ったが、それは本当であった。話を聞くと、私たちを見送りに出ている間に、中国兵が残留者の家を襲った。中国側発行の「有用留用者」の証明書を見せたが無視し、抵抗した人を射殺した。

中国側の要請で残留するのに、安全も保障されないなら残留などできないと、制止を振り切つて最後の列車で逃れて来たという。谷村さん夫妻も無事で来ているのが分かり、お互い涙を流して喜んだ。強制留用命令ができれば連れ戻される恐れもあるので、出発するまでは所在を明らかにしたくないとのことで、内地での再会を約束して別れた。

いよいよ乗船できることになった。連絡などで走り回っている私を村田さんが呼び止めた。「君

は金を盗られたそうだな。一人当たり千円しか持ち帰れないから、余っている人からもらってきたよ」私がよく働いているのを知っていて、皆気持ち良く出してくれたそうだ。紙包みには、細かい金ばかりで千円入っていた。親戚の家までどうやってたどり着こうかと思ひ悩んでいた私にとつては、夢のような有り難いことであった。与えられた仕事をやっただけなのに、気を配ってくれた人たちの好意が身にしみた。

葫蘆島コロトウに着いたときには、もう日が暮れようとしていた。海が見える丘の上には以前日本人の住んでいた別荘が建ち、黄昏の海には明日乗るであろう何隻もの大きな船が見えた。私たちは軒下で最後の夜を過ごしたが、明日は乗船だと思うとそれも苦にならなかつた。岸壁から舳で沖に停泊している黒い貨物船に向かつた。

引揚船は、アメリカの貨物船「ヒュー・M・スミス号」であった。航海中に、栄養不良や心労などによって、故国を目前にして亡くなる人もい

て、その都度、毛布に包まれて海に葬られ、追悼の汽笛に送られて暗い海の中に沈んでいった。さぞかし無念であったろうと同情の念を禁じ得ない。嵐が去り、快晴となった海の彼方に浮かぶのは、夢にまで見た日本の陸地だ。甲板を埋める人々の歓声を乗せて、佐世保の沖合に錨を下ろした。防疫などを経て再び艇で港に向かった。緑なす島々。行き交う漁船、戦乱の地を過ぎた身を、祖国は穏やかな表情で迎えてくれた。

佐世保港で、入国審査や所持品検査などに数日を費やし、別れを惜しみながらそれぞれの故郷に向かつて去って行った。満州で生まれ育ち、親とも別れたままで出身地も定かでない多くの少年たちは、帰るあてもなく困惑していた。ここに至っても、少年たちの苦難は続くのだった。

私とて、帰る所は長野県の善光寺の近くと記憶しているだけで、どのようにして行けばよいのかは皆目見当がつかなかった。

生死を共にした仲間たちとも、これからの連絡

先を知らせ合うゆとりもないままの別れとなってしまう、その後の連絡も途絶えたままとってしまった。

十三歳で関東軍の兵士に任命され、ソ連軍収容所では、「ヤポンスキー・マーリンケソルダート」と呼ばれ、中国内戦では、八路軍や、中央軍（国府軍）と行動し、中国国民党政府からは、日僑俘の標識を着けられるなどして過ごした二年余の日々と、一カ月近い引揚げの旅を終えて、故郷、豊野に帰り着いたのは、昭和二十一年七月二十七日であった。

駅前には見覚えのある旅館、村の中心地に続く田舎道など、記憶を呼び起こしながら親戚の家にたどり着いた。驚く伯母に抱き付いて泣いた。伯母も泣いてくれた。汚れ切り、疲れ切って一人で帰った私を、家中で温かく迎えてくれた。

私は大役を終えて一少年に戻ったのであるが、さらにこの日から別の苦難の道が始まった。